

群 教 ゼ	E03 - 03
	平16.220集

一人一人の児童のよさを認め合う 学級集団づくり

「23 Colors プロジェクト」の実践を通して

特別研修員 武井 郁也 (吉井町立入野小学校)

《研究の概要》

本研究は、小学校5年生の児童を対象に、学級の成員23人のよさを生かす「23Colors プロジェクト」を行うことで、一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育つことを実践を通して明らかにしようとしたものである。具体的には、ミニ集会の「ファーストステージ」や「セカンドステージ」、全員劇「5年1組そして、未来へ」を児童が主体となって計画し、実施し、評価し、改善する活動を行っていくことで、学級集団の育成を目指した。

【キ-ワ-ド：学級経営 小学校 集団活動 自他のよさ マネジメントサイクル】

主題設定の理由

学校は、児童にとって伸び伸びと過ごせる楽しい場でなければならない。自分のよさが実感でき、友だちもそれを喜んでくれる。そうした学級となったとき、学級は子どもの居場所となり、居心地のよい楽しい場所となる。

本学級（第5学年1組）の児童は男子13名（本校区9名・分校区4名）、女子10名（本校区6名・分校区4名）、計23名から成る。進級と同時に、本校区と分校区の児童が一緒になり、本校で学級生活を送っている。しかし、人間関係が限定され、5月に入ってから本校区と分校区の児童が完全に打ち解けていない様子が見られた。

そこで、目的意識を持って学級生活を送ることで、その基盤となる人間関係が形成できると考え、5月下旬に「理想とする6年生になるために、今、この学級に必要なことは何か」（複数回答可）についてアンケートを実施した。その結果、「友だちと仲良くする必要性」について23名中17名の児童が指摘し、「女子のグル-プ化」や「遊ぶ仲間の固定化」が問題点として挙げられた。4月から様々な活動でかかわってきていたものの、特に本校区・分校区での仲間意識が弊害となり、学級で自分のよさを十分に発揮できないでいる児童の実態が把握できた。

これを改善するためには、集団の中での様々な人間関係を体験させ、互いのよさを認め合う場をつくっていくことが必要と考えた。友だちから「すごいね」「へえ、やさしいね」というように認められれば、自分の新たな可能性に気づき、喜びを実感することができる。こうした指導を継続していくことで、一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育っていくと考えた。これは、学年目標である「思いやりを大切にしよう」、さらには学校の教育目標である「豊かな感性を持った子～互いのよさを認め合い、助け合える子～」につながるものである。

学級の成員23人のよさを生かす「23Colors プロジェクト」の取組を通して、学級の中で自分のよさが発揮できる場面や互いのよさを認め合えるような場を構成していけば、一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育っていくと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

学級集団づくりにおいて、児童が主体となって計画し、実施し、評価し、改善する「23Colors プロジェクト」に取り組めば、一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育つことを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 プロジェクト（ミニ集会「ファーストステージ」・学級活動「ファーストステージを振り返ろう」、ミニ集会「セカンドステージ」・学級活動「セカンドステージを振り返ろう」）において、担任が目的を明確に示し、児童が主体となって計画し、実施し、評価し、改善する活動を行えば、互いの気持ちに気付き、友だちに慣れ親しむことができるであろう。
- 2 プロジェクト（全員劇「5年1組そして、未来へ」）において、「5の1パレット」に綴ってきた思いを台本化することで、半年間の学校生活の中で経験した喜びや不安、楽しさや悲しみ等を表現し、互いの気持ちを理解し合えば、自分や友だちのよさに気付くことができるであろう。
- 3 プロジェクト（学級活動「23Colors プロジェクトを振り返ろう」）において、「めあてカード」や「仲良し作文」、「5の1パレット」に積み上げてきた思いをもとに、自分や友だちのよさを発表し合えば、「自分や友だちのよさ」(23Colors)を表現することができ、一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育つであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「一人一人の児童のよさを認め合う学級集団」とは一人一人の児童が互いのよさを認め、そのよさを尊重し合える学級集団のことである。本研究では「よさ」を「個性」として捉えた。

(2) 「23Colors プロジェクト」とは本プロジェクトは、学級の成員23人のよさを23Colorsとして捉え、ミニ集会や全員劇など実践を通して、一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育つことを目指したものである。「23Colors プロジェクト」で活動に用いた各種カード等については表1の通りである。

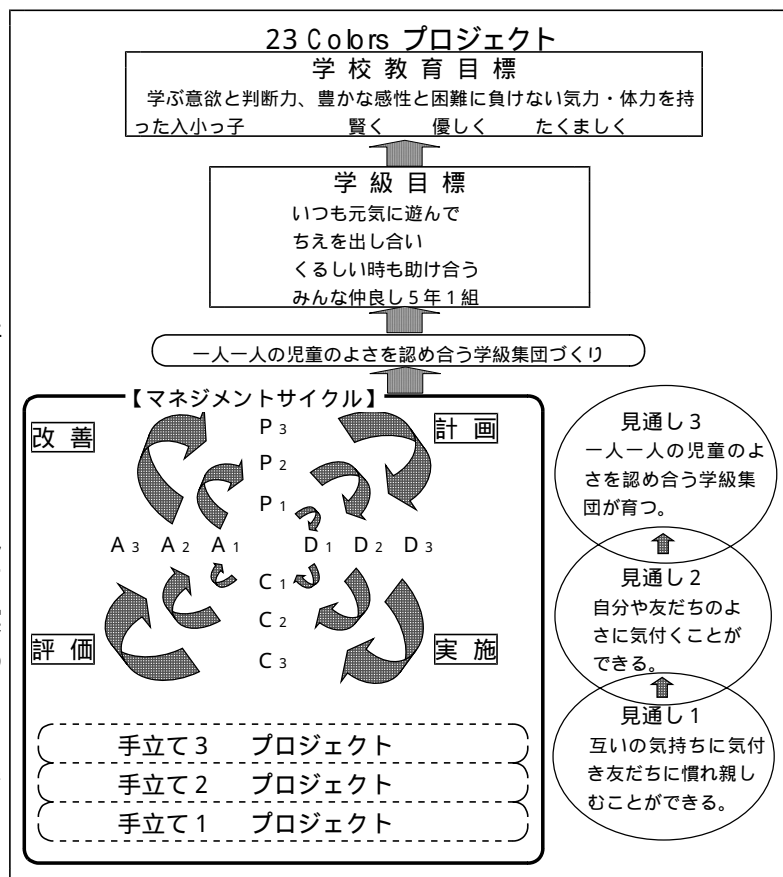
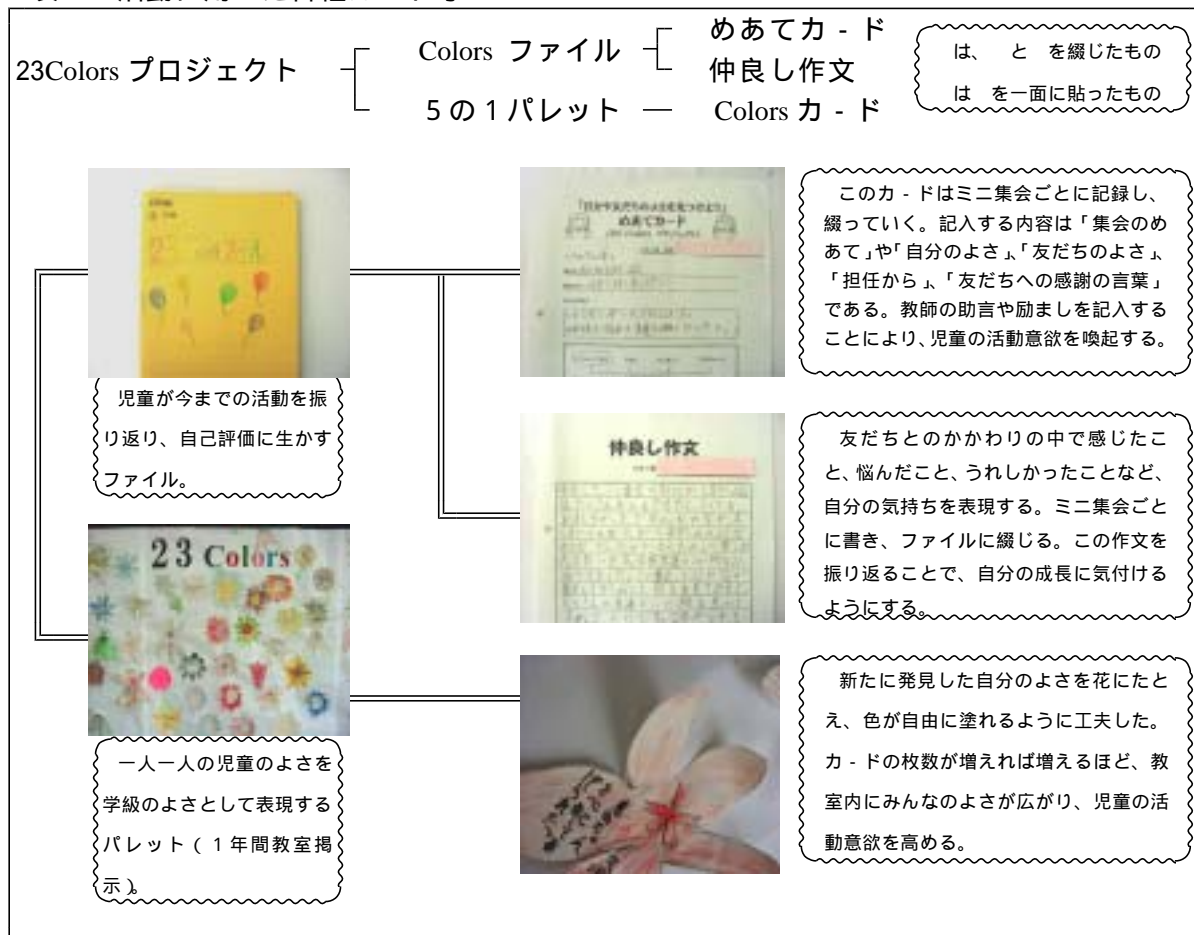


図1 全体構想図

表1 活動に用いた各種カード等



2 実践の概要および結果と考察

検証にあたっては、学級全体と抽出児A子（分校出身、マイペースで、友だち付き合いがあまり上手でない児童）の活動の様子や活動後の感想などを中心に行う。A子は、「本校での学校生活はどうか」という問いに対して4月当初は「本校の人たちと仲良くできるか心配」と答えていたが、児童が主体となって計画し、実施し、評価し、改善する活動を繰り返し行うことで、10月には「ミニ集会で友だちと仲良くなり、本校の生活にほとんどとけ込んでいる」と答えるまでになった。学級の中に自分のよさを発揮できるようになってきている。

(1) 互いの気持ちに気付き、友だちに慣れ親しむことができたか。（見通し1）

ア 実践の概要

学級を3～4名で構成する6グループに編成し、6月から7月にかけて1週間に一度、ミニ集会の「ファーストステージ」を実施した。その内容は、「大縄跳び」「ねずみのしっぽ」「さんぱちゲム」「サッカー」「タイヤじゃんけん」「鬼ヶ島ゲム」である。そして、集会後の学級活動で活動の振り返りを行った。また、9月から10月にかけては「ファーストステージ」と同様のグループ、遊びで「セカンドステージ」を実施した。「セカンドステージ」では、「ファーストステージ」での反省を生かし、遊びのルールを工夫したり、自分たちの役割を確認したりした。そして、集会後に学級活動で振り返りを行った。

イ 結果と考察

ミニ集会「ファ - ストステ - ジ」後の仲良し作文で、A子は、「私はちょっとだけ悔しかったけど楽しかったです」と書いている(資料1)。A子はこの集会でじゃんけんに負けて悔しいと思ったが、それ以上の喜びを感じた。その喜びとは今まであまり話したことがない本校区M子と順番を待っている間に話げできたことである。A子にとって、本校区の児童と話をするのが何より嬉しかったと思われる。学級全体の児童の様子を見ても児童の感想から、本校区の児童は分校区の児童のことを理解し、分校区の児童も本校区の児童の中に打ち解けていく様子うかがえた(資料2)。しかし「ミニ集会でまだ十分でないこと(課題)は何ですか」の問いに対して児童は「もっとルールに工夫が必要である」(8名)や「協力できていない」(4名)などと答える児童が多く見られた。そこで、充実したセカンドステ - ジにするための話し合いの場を設けた方がよいかと投げかけてみると児童の91%(23名中21名)が「はい」と答えた。その主な理由は「話し合わないともっと仲良くなれない」や「話し合いをすれば、次のステ - ジにつながる」で、話し合いを通してミニ集会をよりよいものにしていける実感や改善への期待感を持っていることがうかがえた。その後、話し合いの場を持ち、それぞれのグループで改善策を考えた。

ミニ集会「セカンドステ - ジ」では、「とても変わった」と「変わった」を合わせると20名の児童が「ミニ集会是今までの自分を変えた」と感じている(資料3)。抽出児A子は、「とても変わった」を選んだ。その理由として「私は、本校に慣れてきて自分が積極的になってきたと思った。これからも、もっと自分を積極的にしていきたい」と述べている。A子は成長した自分に喜びを感じ、自分のよさを発揮するとともに、これからの自分をもっと変えていきたいと思っている。他の分校児童に関しても、7名全員が「とても変わった(3名)」「変わった(4名)」を選んだ。本校区の児童も自分自身を振り返り、自分の成長を実感することができた。

資料1 仲良し作文

仲良し作文

A子

わたしは、ミニ集会でタイヤじゃんけんをしました。私の順番は、前から8番目くらいでした。私の番になりました。最初の相手はYちゃんでした。私がグ - で、Yちゃんがパ - だったので負けてしまいました。私はちょっとだけ悔しかったけど、楽しかったです。私の前の人はMちゃんでした。いろいろな話をしてくれて、待っている間が楽しかったです。

[注] ~~~ は著者が付加

資料2 振り返りの結果

○ミニ集会「ファ - ストステ - ジ」はどうだったか。

【分校区児童】

- ・新しい友だちができて、みんなと仲良くなれた。
- ・4月は本校区の友だちと遊べなかったけど、ミニ集会で遊べるようになった。
- ・休み時間に遊べるようになった。友だちと話をするのが多くなった。(A子)

【本校区児童】

- ・学級全員で遊べるのが楽しいと思った。
- ・4年生の時は分校の人を嫌がっていたけど、とてもいい人たちだとわかった。
- ・分校区の人は明るい人が多いと思った。

資料3 アンケート1の結果

質問：ミニ集会是「自分」を変えたと思いますか。

とても変わった 7名(分校区4名) あまり変わらなかった 3名(分校区0名)

変わった 13名(分校区4名) 変わらなかった 0名(分校区0名)

【主な理由】

- 遊ぶ人が増えて、休み時間が楽しくなった。(本校区児童)
- いろいろな人と遊ぶようになった。(本校区児童)
- 大勢の前でも緊張なくなり、本校での生活が楽しくなった。(分校区児童)
- 集会を繰り返すうちに、友だちの気持ちがわかるようになった。(分校区児童)

以上のことから、児童が主体となって計画し、実施し、評価し、改善する活動を繰り返し行うことで、本校区と分校区の児童が互いの気持ちに気付き、友だちに慣れ親しむことができたといえる。

(2) 自分や友だちのよさに気付くことができたか。(見通し2)

ア 実践の概要

ミニ集会では、友だちに慣れ親しむことはできたものの、多くの児童が自分や友だちのよさ(自分以外の22Colors)を十分見つけられなかった。このプロジェクトのまとめとなるファイナルステージでは、「全員劇」を行った。内容は、半年間を振り返り、一緒に学校生活を送り始めた4月から、11月までの児童の様子を劇にしたものである。その場面は「出会い～私たちの気持ち(分校区)～」「出会い～私たちの気持ち(本校区)～」「ファーストステージの思い出」「セカンドステージの思い出」「これからの私たち」の5場面とした。それぞれの場面で、一人一人の児童の正直な気持ちが表現された。また、この劇は5年生のもう一つの学級である2組に公開された。

イ 結果と考察

全員劇では、一人一人の児童が心に思っていたことを言葉で表現した。今まで表に出したことのない本当の気持ちを伝えることで互いに理解し合いたかったものと思われる。児童は、本校区と分校区の互いの内に秘めた思いを初めて知り、心から理解し合うことができた。

A子は「出会い～私たちの気持ち(分校区)～」を希望して演じた。A子は、「本校での生活が楽しみ」や「本校で友だちができるか心配」等、自分の期待や不安の気持ちを劇で表現した。多くの児童がA子の揺れ動いた心に気付き、感動することができた。ある本校区の児童は劇の感想の中で、「分校区の子の気持ちが分かった。これからは協力して仲良くしていきたい」と述べている。A子の気持ちがこの劇を観ている児童に伝わったのである。

また、劇終了後は互いを理解し、自分や友だちのよさを見つけることができた(資料4)。児童の感想からもわかるように、多くの児童がいろいろな角度から自分や友だちのよさについて書いている。A子も「私のよさは、誰とでも仲良くできることだと知った」と書き、自分に自信を持っている様子うかがえた。

児童が2組の前で発表したいと言ったのは、本校区と分校区の児童が互いに理解し合えた感動を伝えたいからであり、自分や友だちのよさに気付くことができた喜びを学級としてだけでなく、学年全体として理解し合いたかったからだと思う。以上のことから、児童は自分や友だちのよさに気付くことができたといえる。

(3) 一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育ったか。(見通し3)

ア 実践の概要

5年2組に公開した後、学級活動で活動の振り返りを行った。児童一人一人が「Colorsファイル」や「5の1パレット」をもとに「23Colorsプロジェクト」(プロジェクト～プロジェクト)を振り返り、自分や友だちのよさについて発表し合った。また、2組の児童に全員劇を観た感想を聞き、このプロジェクトを振り返る資料とした。

資料4 アンケート2の結果

質問:「自分や友だちのどのようなよさに気付きましたか」

【自分のよさ】

- ぼくのよさは大きな声で発表できることだとわかった。
- 私のよさは、誰とでも仲良くできることだと知った。(A子)
- ぼくは結構優しいということがわかり、嬉しかった。
- 私は、字を丁寧に書くことができる。

【友だちのよさ】

- Bさんは、作文を書くことや絵を描くことが上手だ。
- C君は、友だちに親切にしてくれる優しい人だ。
- D君は、明るく、みんなを笑わせることが得意だ。
- Eさんは、困っている人にすぐ声をかけてあげられる。

イ 結果と考察

自分や友だちのよさを発表し合うことで、自分では気付かなかった新たな自分のよさや友だちのよさに気付くことができた。この「23Colors プロジェクト」に関するアンケートからは、自分や友だちのよさを認める多くの意見が出された（資料8）。抽出児A子は、「みんなのよさがよくわかってきて、自分から多くの友だちに話しかけられるようになった。みんなもよく話しかけてくれる」と答えた。

A子は友だちのよさに気付くことがきっかけとなり、今までなかなか話しかけることのできなかった友だちに話しかけることができるようになってきている。そして、そのようなA子に対して話しかけてくる友だちも増えてきている。A子は自分のよさを実感し、自信を持って友だちと接することができるようになった。また、A子にとって自分に話しかけてくる友だちが増えたことで、学級が居心地のよい楽しい場となりつつある。学級全体としても児童の感想から、友だちのよさを認める意見や友だちから自分のよさを認められる意見が多く出された。このような結果から、一人一人の児童のよさを認め合う学級が育ってきているといえる。

資料8 アンケート3の結果

質問：この「23 Colors プロジェクト」はどうでしたか。

- このプロジェクトで、自分や友だちのよさがわかった。これからもミニ集会をやっていたい。
- みんなのよさがよくわかってきて、自分から多くの友だちに話しかけられるようになった。みんなもよく話しかけてくれる。(A子)
- 自分のよさ(あまり活躍しないけど、よく考えているところ)を分かってもらえてうれしかった。
- 本校区や分校区の人の気持ちが変わった。人って必ずよいところがあるものなんだと思った。
- ミニ集会や劇で自分や友だちのよさがわかった。今は一緒に遊んだり、勉強したりしているのだから本校も分校も関係ないと思った。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- 児童がミニ集会の「ファーストステージ」を改善して「セカンドステージ」を実施することで、それまでの活動の課題が明確になるとともに、見直すことができ、活動に対して意欲的に取り組むことができた。
- 児童が自分の心の内面を劇を通して表現したことで、互いの気持ちが理解し合える集団が育ち、学級が居心地のよい楽しい場所となった。
- 「23Colors プロジェクト」を継続してきたことで、自分や友だちの新たなよさに気付くとともに、一人一人の児童のよさを認め合う学級集団が育ってきた。

2 今後の課題

今後は、一人一人の児童が互いに認め合えたよさを学級の中で十分発揮し、児童相互の好ましい人間関係を深めていく必要がある。また、来年度のクラス替えに向けて、5年生のもう一つの学級である2組の児童と集団活動を実施し、互いのよさを認め合うことが必要である。

参考文献

- 倉田侃司 編著 『個のよさを伸ばす小学校の学級経営』 明治図書（1991）
- 渋谷憲一 著 『子どもを伸ばす評価』 ぎょうせい（1991）
- 宮川八岐 編 『個性を生かす教育と集団指導』 教育出版（2003）